＜前回＞オリエンテーション
１．近代の思想状況と自然神学
２．自然神学の新しい動向
　２－１：自然神学とコミュニケーション合理性
　２－２：クレイトンと脳神経科学
　２－３：マクグラスと伝統特殊的合理性、意味論
３．形而上学批判と形而上学再構築
　３－１：ハイデッガーと解釈学　7/9, 7/16
　３－２：ホワイトヘッドとプロセス神学　7/23
Exkur：人文学の新しい可能性。科学技術の神学にむけて。

＜前回＞クレイトンと脳神経科学
（１）クレイトンと科学論の神学
１．パネンベルクからクレイトンへ
（２）脳神経科学と宗教
３.「脳科学は宗教哲学に何をもたらしたか」(『脳科学は宗教を解明できるか？』春秋社)
４.「はじめに」: 1980 年代以降、脳科学は周辺の関連領域を巻き込みながら急速な発展を示している。これはキリスト教研究を含む宗教研究全般にとっても無関係ではない。
５.ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うか――宗教多元主義から脳科学への応答』。
・宗教と自然主義（宗教批判）: 自然主義とは、人間の経験する諸現象の説明は自然領域内部で可能であり、超自然的原因を持ち出す必要はないとする立場を指しており、歴史主義と共に、近代的知の基本的信念と言えるものである。
・自然主義の立場からの説明。様々なタイプの宗教経験が脳内の自然のプロセスによって生じる。→宗教経験は「もっぱら妄想である」と主張する重大な論拠。
６．脳と心の関係をめぐる三つの立場：心脳同一説、随伴現象説、心脳二元論
　心脳同一論（Mind/Brain Identity。脳は何かしら特殊な物理的状態ないし過程であって、意識はその脳神経活動、つまり脳の電気化学作用に他ならない、とする理論)。強い自然主義あるいは還元主義的物理主義（唯物論)。
７．心脳一元論批判（論点先取・循環論法)、随伴現象説（Epiphenomenalism）批判
10．ヒックが二元論を選択する理由。
「明らかに意識が原因となって脳に働きかけるという状況を検討しなければならない」。心的因果の存在に基づく自由意志の擁護。「決定論は道徳性をしだいにむしばんでいく」。
11．まとめ：ヒックは、心脳同一論と随伴現象説という自然主義的な脳科学を批判し――ヒックはこの連関で弱い自然主義と強い自然主義の区別を行っていた――、自由意志（心が脳に影響を及ぼす、下向きの因果性、心的因果性）の擁護することを試みる。しかし、このヒック自身の議論もまた論点先取を行っており、ヒックの批判にもかかわらず、創発性の議論（創発主義）は追求すべき選択肢としてまだ生きているのである。
（３）クレイトンと創発主義
12．創発主義の射程
・哲学的概念として創発性(emergence)：1875 年、ジョージ・ヘンリー・ルイス（George Henry　Lewes）による。前提となる哲学的自然理解（自然哲学）は、アリストテレスに遡る長い歴史を有している。
・創発性の議論は、非平衡熱力学、複雑系、カオス理論、一般システム論、自己組織化＝オートポイエーシス論などの諸理論と結びつきながら、物質と生命との関係性を中心に展開されてきた。しかし創発性の問題は、有機的に組織された複雑系という問題領域を超えて、いまや、物理学から社会学、そして神学まで広範な領域にわたって論じられており、「意識・心と脳」という問題領域もその中に含まれているのである。

・ティリッヒ：アリストテレスと進化論という二つの理論を接合することによって、物質、生命、心、精神（文化・道徳・宗教）という諸次元の生成（諸次元の統合体としての人間的生の生成）を論じているが、このティリッヒの自然哲学の構想を創発主義と接合することは不可能ではないだろう。ティリッヒの生の次元論：実在の諸階層を、下から上に、物質、生命、心、精神（文　化・道徳・宗教）と名づけ、以下の検討を進める。

Ａ．創発性と生命

Ｂ．創発性と心

以上の議論は直接神の問題には関わらない。心と脳の関係をめぐる三つの立場は、それ自体は神（神の世界の関係）を論じているわけではない。もちろん、宗教経験あるいは宗教には関連しているが。問題は、神と宗教とのそれぞれを論じる際の議論の循環性である。

Ｃ．神と創発性

27. 創発主義の宗教に対する意味。創発主義の神概念。

（４）まとめ

・現在、脳科学との関連にした宗教研究は、きわめて活発な状況にあり、今後もその動向は継続することが予想される。様々な研究成果が現れ、宗教研究の広い領域に対して様々影響を及ぼすことにもなるであろう。

・現在のところ、あるいは当分の間、宗教研究者が脳科学の成果に一喜一憂する必要はない、冷静な対応で十分である。たとえ、脳の物理的活動が神イメージを生み出すことが、あるいは宗教経験が脳のどの領域と関わっているかが解明されるとしても、それは直ちに神の実在の否定といったことにはならないからである

・ヒックが指摘するように、宗教経験にとって重要なのは、短期的な経験の有無ではなく、それが長期にわたる意識的な努力のプロセスにおいてもたらす結果（成果・実）なのであり、それは、現在の脳科学が行っているような実験の範囲を遙かに超えた時間経過（場合によっては、人生の全体）においてはじめて批判的に検討され得る。

心と神を関連づけるには、その間にさらにいくつかのレベルを設定する必要がある。

２．　自然神学の新しい動向
２―３：マクグラスと伝統特殊的合理性、意味論

Ａ．自然神学とコミュニケーション合理性

1) 自然神学は異文化に対する弁証（古典文化への弁証）と異端に対する論駁（教会に対する教義学）という二つのフロントにおいて成立し ── 「二つのフロントの戦い」（ibid., p.199） ── 、これらを相互に連関づけている神学的思惟である。

2) 自然神学は、弁証と論駁という他者とのコミュニケーションにその成立の場を有しているのであり、自然神学は、この意味において、キリスト教思想のコミュニケーション合理性の問題と解することができる。

3) 自然神学あるいは神の存在論証は信仰内容をめぐるコミュニケーションにおける合理性の確保の問題と解することができる。信仰対象である神との関係で言えば、それは祈りや讃美のコンテクストにおける信仰の表明であり、同じ信仰を有する共同体内部では信仰者各自の信仰内容の合理的表現を可能にし、信仰内容が変質し逸脱するのを防ぐ機能を果たしうる。また、信仰者自身にとっては、信仰内容の自己理解を促す。以上は信仰共同体の内部コミュニケーションであり、自然神学（広義）はその合理性の確保に関わっていることになる。次に、異端者や有神論的異教（キリスト教に対してはユダヤ教、イスラム教など）に対しては、自然神学は、論争相手がどんな原理に立っているか、またお互いが原理のどの部分を共有しているか、一致できない部分は何か、などを明確化し、その上で論証が可能な場合にはその論証の合理性を確保するのに貢献しうる。もちろん、論証が不可能な場合は、相互の論破という作業に移る。無神論者の場合も理論的には異端者や異教の

場合と同様であり、こうした外部コミュニケーションにおいて自然神学のなす貢献は、共通の議論の場を明確にし、対話可能性の範囲を明示することである。以上の二つのコミュニケーションの区別は、ペリカンの議論において確認した、「弁証としての自然神学」と「前提としての自然神学」の区別に対応するものである。この区別の存在を含めて、現代に思想状況における自然神学の可能性を考えるときの第一のポイントは、自然神学を宗教におけるコミュニケーション合理性の問題と考えるという点であろう。

B．自然神学と伝統特殊的合理性

（1）普遍主義とは何か

ティリッヒとブーバーの場合（40 年にわたる交流を振り返りつつ、ブーバーを偲んで書いた文章の一節）。

「われわれの会話は、けっしてユダヤ教とキリスト教との対話はなく、神、人間、自然のあいだの関係をめぐる対話であった。それは、お互いに、どこまでもユダヤ教徒でありプロテスタントでありながら、しかも、どちらもユダヤ教やプロテスタント思想の限界を踏み越えてしまっている一人のユダヤ教徒と一人のプロテスタントとのあいだの対話であった。このような具体的な普遍主義（Dieser konkrete Universalismus）こそ、唯一の正しい形式の普遍主義（die eizige gerechtfertigte Form des Universalismus）であるように私には思われる。」（ティリッヒ「マルティン・ブーバー――彼の逝去にさいして試みる一つの評価（1965）」、武藤一雄・片柳栄一訳『ティリッヒ著作集・第十巻』白水社、371 頁）

↓

いわゆる啓蒙主義的な合理性・普遍性とは別の合理性・普遍性の可能性。

（2）A. E.マクグラス『「自然」を神学する――キリスト教自然神学の新展開』

教文館、2011 年。

自然神学の射程

1．ウイリアム・ペイリーにとって、自然神学とは本質的に自然観察についての知的分析であった。

2．人間性の内部にはその深みに、事物を理解し、生命の組織内にパターンを見いだそうとのあこがれが存在している。自然神学は、それ独特のアプローチを採用してはいるものの、理解するというこの一般的な人間の企てに属している。

3．人間の知覚は、意義という事柄に関わっている。それは、身体的な生き残りという観点からの意義であることはもちろん、さらに、生における意味、人格的同一性、価値を確立することを通して、心理的に生き残るという観点からの意義でもある。それにもかかわらず、啓蒙主義の残存する影響によって、しばしば自然神学は、知的見解の一種として単純に概念化されることになった。これに反論して、われわれは、自然神学が、「さめた考察」というよりむしろ「熱い知覚」という観点から理解されるべきであると主張する。

4．自然を神の被造物として知解可能にする枠組みを提供。

これによって、われわれは、宇宙における自分の位置を理解するためにこの根本的なスキーマが有する含意と、環境に対する自分の責任とそれによって帰結する適切な行為や態度とを判断するようになる。

5．自然神学はまた、意義の問いに注意を向けるのである。

→真理・善・美を包括する合成概念

価値についての問いであり、真理よりもむしろ、善の探究に関係している。

自然神学はしばしば「自然法」の範疇のもとで考察される諸問題を包括しなければならない。自然の領域内部における特定の行為の形式、生き方、あるいは倫理的態度を含むかどうかとの問いに、明らかに関わっている。

啓蒙主義批判の系譜

６．ジョナサン・エドワーズ(Jonathan Edwards、1703-58)は、自然の合理的な評価を強調する啓蒙主義に応える論述の中で、被造物の内に神の美を見分けることの重要性と合理的な分析によって人を回心させることの不可能性とを強調している。エドワーズの考えによれば、回心とは「神的な事物の美と栄光を理解すること」に依存した一つのプロセスなのである。

７．ロマン主義の台頭は、啓蒙主義と結びついた自然への美的また情動的には薄められた応答に対する文化的反発という一面ももっていた。それゆえに、ジョン・キーツの複雑な詩「レイミア」(1820) は自然の驚異を合理的に説明することに対する抗議と部分的には解することができる。

キーツの見解によれば、自然は人間から情動的かつ知的な応答を引き出す。この情動的で知的な応答は、事物を理解しようとする欲望を含むとともに、それを超えて、畏怖、賞賛、上昇、恐怖といった経験へ広がって行く。

８.「畏怖」を規定することは容易ではないが、特定の現象についての崇高で神秘的な感覚と考えてよいだろう。「畏怖」の概念は、人間の自然との関わりをめぐる宗教学的、社会学的、心理学的な説明を、顕著な仕方で特徴付けている。

９．自然神学はさらに豊かで包括的な自然的秩序に対する人間の応答の範囲を表現できるということなのである。ここで、合理的な説明は、神の創造の現前に直面した畏怖の感覚に応じる崇拝と礼拝によって補完されねばならない。

自然への包括的アプローチと無神論への応答

10. 反宗教的論客であるリチャード・ドーキンス

宇宙は真に神秘的で偉大で美しく、畏怖の念を抱かせる。宗教的な人々が伝統的に抱くたぐいの宇宙の見方は、宇宙の現実のあり方に比べれば、つまらなく、哀れでつたないものあった。組織された宗教が提示する宇宙は、みすぼらしい小さいな中世の宇宙であり、極度に限定されたものである。

11. ドーキンスの批判は、見当違いの誤解に基づいたものではあるが、それによって自然界への包括的なキリスト教的アプローチの必要性がいっそう重要で緊急のものになる。

キリスト教自然神学の伝統とその再建

12. 真理、美、善という概念的に相互に連結された諸観念が、啓蒙主義に先立つキリスト教神学において、古代にその起源をもつ。

中世盛期には、「知性的美」という考えがキリスト教的な実在観の重要な局面を表現する仕方であると見なされていた。創造の神学は、ウンベルト・エーコが「宇宙についての一切善性的見方(pancalistic vision)」と名付けたものを基礎づけており、またこの宇宙観は、この発展的な時代を特徴付ける「知性的美の感覚」を根拠としている。合理性、美、そして善はそれぞれが同一の創造者の諸様相であって、神の被造物の中に反映され、時にはおぼろげであるとしても、人間によって識別されるのである。

13. 一八世紀を通して、真理、美、善を結びつける作業は、ロマン主義の勃興と関連しており、それは自然へのあまりにも合理主義的なアプローチに対するその不満をはっきりと表現するのに有益であった。

14. これらの広大な領域に踏み込む程度のものにとどまることになる。それが、さらなる討論と探究のための問いかけとなり、自然神学を回復し発展させるのに有益で拡大された枠組みを示すものとなることを、わたしは希望している。

19. この構想がこれらの諸観念に一定の概念的安定を与える神学的枠組みを提供する。

「救済の経綸」というきわめて重要な考えは、世界には明らかに部分的な非合理性、醜さ、悪が存在しており、また世界の合理性、美、善について知られうるものに対して人間が適切な応答に失敗しているということについて、少なくとも説明の一端を提供するので

ある。

真理、自然神学と他の宗教的伝統

20. キリスト教的伝統の内部から、共通の人間的知性の展望を示し探求するための出発点を提供する。

自然神学はキリスト教的伝統に特有なものではあっても、普遍性の憧れを有している。
伝統特有ではあるが伝統を超えた合理性を具体化する。

→ キリスト教とそのライバル双方についての洞察を与える。
これらは普遍的な仕方で受け入れられている基準によって証明されているわけではない。そのような基準は存在しない。

キリスト教自然神学はメタ伝統的装置として機能する。

啓蒙主義的な「伝統超越的な合理性」→伝統特有の合理性
→伝統特有で伝統超越的な合理性
a tradition-specific yet trans-traditional rationality

21. 十全な自然神学

実在についてのキリスト教的洞察は、教会の領域の外で、福音の響き、暗示、うわさ、予期が存在することを、認める。

トールキン：すべての宗教と世界観は神話（実在を説明する試み）に基づいている。より大きな全体の或る局面（分散された断片的光）を反映する。キリスト教も神話という構造的形式をとるが、すべての他の神話がその近似に過ぎないような現実的な神話である。

ルイス：キリスト教と他の宗教との類似性は、実在についてのキリスト教的見方の包括的性質に基づく。すべての人間に何らかの神的照明が与えられている。

22. キリスト教が大きな物語を提供するということ。

真理は受肉する。神話は事実となり、事物の本質的意味は神話という天界から歴史という地上へ降りてくる。

すべての事物を理解可能にする。下位の物語を派生させる。下位の物語を設定し説明し、福音の大きな物語にその完成を見出す。

23. キリスト教的伝統外部における世界への部分的かつ断片的であるが、しかし現実的な洞察の存在を肯定できる。キリスト教的伝統はその十全な開示である。

→ 宣教論へ：神的ロゴスはすべての信仰において働いており、それはキリスト教宣教が発展させるべき橋、門となる。cf. 神の宣教(Missio Dei)か、教会の宣教か

24. 他宗教の信徒との対話の問題、エディンバラ宣教会議（1910）

その土地の文化（キリストにおいて、キリストを通して完成される）への尊敬と関わりを要求する。土着文化と福音の「接触点」

↓

包括主義、宗教の神学へ。公共性の問題として。

（3）自然神学と意味論

25. Alister E. McGrath, *Surprised by Meaning. Science, Faith, and How We Make Sense of Things*, Westminster / John Knox Press, 2011.

Contents

1. Looking for the Big Picture
2. Longing to Make Sense of Things
3. Patterns on the Shore of the Universe
4. How We Make Sense of Things
5. Musings of a Lapsed Atheist
6. Beyond the Scientific Horizon

7. A Christian Viewpoint
8. The Deep Structure of the Universe
9. The Mystery of the Possibility of Life
10. The Accidents of Biological History?
11. History, Culture, and Faith
12. The Heart's Desire: Longing for Significance
13. Surprised by Meaning

Chapter 1
detective fiction appeals to our deep yearning to make sense of what seem to some to be an unrelated series of events.（1）
But information is not the same as meaning, nor is knowledge identical with wisdom.（3）
The intellectual vitality of the natural sciences lies in their being able to say something without having to say everything. Science simply cannot answer about the meaning of life and should not be expected --- still less, forced --- to do so. To demand that science answer questions that lie beyond its sphere of competence is potentially to bring it into disrepute. These questions are metaphysical, not empirical.（4）
what some philosophers call the "ultimate questions"（5）
Faith is thus to be seen as a form of motivated or warranted belief. It is not a blind leap into the dark, but a joyful discovery of a bigger picture of things, of which we are part.（6）

Chapter 2
Terry Eagleton
William James pointed out many years ago, religious faith is basically "faith in the existence of an unseen order of some kind in which the riddles of the natural order may be found and explained.（8）
Simone Weil

Chapter 3
none of them can exactly be said to give us a reason for living.
Christians believe that there is God, whose loving presence and grace transform human nature and give us a reason to live and to hope. It cannot be proved. But it is a belief which, if true, utterly transforms life. We seen everything in a new way and a new light. The atheist believes that there is no God. This article of faith cannot be proved either. Christianity and atheism are both faith, what William James calls "working hypotheses." They are of critical importance to people's lives. But they can't be proved.（20）
These were passionate and deeply moral beliefs. Yet they could not be proved to be true.
I left him with the thought that the things that really matter in life are ultimately matters of faith. They can't be proved. But we continue to believe in them, and we are justified in doing so. That's just the way things are.
To believe is human.（21）

Chapter 4
Science is about sense-making. The natural sciences try to identify patterns within the natural world and then to seek out the deeper structures which can account for these patterns:（22）
The most familiar type of explanation is causal.（23）
Science is about warranted belief, not about *rational* belief. The history of science is about the recalibration of notions of "rational" in the light of what was actually discovered about the deeper

structure of nature.（27）
It is important, for example, to realize that not all explanations are causal. Furthermore, the process of explanation is often regressive, ...
it has become increasingly clear that science is raising questions which it cannot answer.（28）

Chapter 6
Scientific truth is exact, but it is incomplete.
To be human is to yearn for meaning and answers to the riddles of existence. Yet the scientific enterprise stops short of those ultimate questions, and rightly so. It knows its limits, and its limits are determined by evidence. But sometimes that evidence seems to point beyond itself, to another world just over the horizon, beyond scientific investigation.（40）
Science cannot deal with questions of meaning or value: it can only deal with matters of fact.
many of the deepest and most engaging questions about the nature of the universe have their origins in a fundamentally religious quest for meaning.（41）
For Einstein, explicability itself clearly requires explanation. The most incomprehensible thing about the universe is that it is comprehensible.（41-42）
The point is simple: nature is open to many legitimate interpretations. Science, in itself and of itself, is neutral. It can be interpreted in atheist, deist, and many other ways --- but is does not demand to be interpreted in any of these ways.（47）
Earlier, we noted, C.S. Lewis's characteristic assertion that Christianity makes sense in itself and makes sense of everything else.（48）

Chapter 9
The laws of nature seem to be "fine-tuned" in order to make life possible.（66）
the fine-tuning of the universe
it resonates strongly with the Christian vision of reality（72）
The capacity of Christianity to map these phenomena is not conclusive proof of anything. It is, however, highly suggestive.（73）

Chapter 11
The Enlightenment had a thoroughly optimistic view of human nature.（83）
Eagleton describes the "dream of untrammeled human progress" as a "bright-eyed superstition," a fairy tale...（85）
a luminous example of "blind faith."（86）
We bear God's image, yet we are sinful.
A recognition of this profound ambiguity is essential if we are to avoid political and social utopianism,（87）
Scientific advance had placed into our hands new technologies and techniques: thus we can do thing today that our ancestors could only have dreamed of. Yet this progress raises some real problems. A medical advance that helps us understand how the human body works might lead to new cures; yet it could also lead to a weapon of mass destruction, designed to use this knowledge of human physiology to destroy populations.（88）
the awkward fact that the engine that drives scientific advance is sometimes military（89）
Realism about human nature（90）

Chapter 12
The Marxist creed has now been inverted. The true opium of modernity is the belief that there is *no* God, so that humans are free to do precisely as they please. We create a moral universe in

which we are free to do as we please. There is no ultimate accountability. (93)
Lewis, however, argued that our longing for significance is a maker of something that lies beyond the thresholds of our experience. It is a clue which suggests that human beings are created for something better than the world that we know.
Lewis certainly is not alone in having experienced a deep sense of desire for something unknown, possibly unknowable.
Matthew Arnold
Blaise Pascal (1623-62) saw human longing as a hint pointing towards our true goal: (95)
Human beings possess an instinct of transcendence, (99)
For Lewis, the heart's desire can never be satisfied by anything that is finite or created. A door must be opened so that we can enter into another world, within which our true satisfaction and joy are to be found. (100)

Chapter 13
Reality is open to multiple interpretations. (101)
The Christian faith enables us to make sense of things, so that we hear tunes where others only hear noise, and see patterns where others see disorder and chaos.
The Christian faith offers a frame work of meaning (103)
this framework of meaning is not something that we manage to figure out by ourselves, after an exhaustive analysis of all the options. The meanings that we quest is *disclosed* to us. We are, so to speak, "surprised by meaning." The traditional Christian language of "revelation" affirms that the meaning that all human beings seek, yet find so elusive and mysterious, has been shown to us. (104)
the Enlightenment was so diverse that it cannot really be spoken of as a single movement. Instead of speaking of human "rationality," we must speak of "rationalities." The Enlightenment turns out to be a rational multiverse, (105)
The really important point is this: we do not define ourselves, but we are defined by another, (107)

Conclusion : Faith is part of the human condition. (113)

26. 宗教と文化、宗教的多元性と文化的多元性を貫く問いとしての「意味」
↓
意味論からコミュニケーション合理性の解明へ。

（4）普遍性と終末論

27. 啓蒙的合理性・普遍主義は終わったのか。
↓
歴史の中の合理性・普遍性：伝統特殊的
伝統特殊的であっても普遍性に関与する限り、理想的発話状況の先取りが必要である。
啓蒙的普遍主義は形式的に先取りされた合理性として解釈するとどうなるか。
啓蒙・カント主義

28. 一つの神学と時代的制約における三つの形態（モルトマン）
自然神学、啓示神学、栄光の神学。啓示神学は歴史という条件下での自然神学。
→　栄光の神学は終末という条件下での自然神学。 栄光の神学を先取りしその形式性を表現すると啓蒙的合理性と合致するだろうか。